

もろこしが原と『更科日記』

—平安時代中期—



「ねえ、お姉さま、それでそのあと源げんじ氏の君きみはどうなったのです」

「それが、私おほもうろ覚えおほで…」

「えーそんなー。その続きのお話わしが知りたいわ。お姉さまは『源氏物語』をお読みになっ
たのでしょ」

「そんなこと言ったって、私が読んだのは都みやこにいるときよ。それも一度だけ。細かいところ

「までは覚えていないわよ」

話をしているのは、菅原孝標の娘たち。孝標は、上総国かずきのくに（現在の千葉県あたり）の長官で、京の都からやってきていたのです。

娘たちの名前は、何と呼ばれていたのか伝わっていません。ここでは、姉をいちのひめ一ノ姫、妹をにのひめ二ノ姫と呼ぶことにしましょう。

「それじゃあ、お義母かあさまならご存知ぞんじよね」

「私も都にいるときに読みましたけど、そこところはちょっと思い出せないわ」

「あく私も源氏物語が読みたいわ。都に帰るのが待ち遠しい」

このころは、印刷技術ありません。物語は、書き写して回し読みをしていました。ですので、地方では源氏物語だけでなくほかの物語も手に入れることが難しかったのです。

二ノ姫が十三歳のとき、父の孝標が都に帰ることになりました。

「これで、源氏物語やほかの物語もたくさん読めるようになるのね」

出発の日、都に帰れるうれしきでいっばいの二ノ姫が、住み慣れた家を振り返えると、
「都でいっばい物語を読めますように」と毎日お参りした薬師仏がじつとこちらを見ている。二ノ姫のほほを一筋の涙がつつたつて落ちました。

二ノ姫たち一行は、上総国から下総国、武蔵国を越え、相模国へ入りました。そこからは、海辺の砂浜を進みます。とても長く歩いたような気がしました。

花水川の近くまで来たときです。

「あのお山、ちよっとおもしろい形をしていない。なんとという山かしら」

「近くにいる里の者に聞いてみましょう」

二ノ姫の問いに、姫たちの身の回りの世話をしている侍女が言いました。

しばらくして戻ってきた侍女は、こう答えます。

「あの山は、高麗山こまやまというそうです。それからこの辺りは、もろこしが原と呼ばれている
のことです」

「コマ、モロコシ…」

「なんでもこの辺りは、高麗こうらいの国（かつて朝鮮半島にあった国、コマとも言った）や唐とうの国
（かつて中国大陸にあった国、モロコシとも言った）など異国いこくから来た人が、移り住んだと
ころなのだとか」

「へえ、そんな歴史があるのね」

「夏には、河原を中心に大和やまとなでしこの花がたくさん咲くそうです。薄桃色の錦にしきを敷しきつ
めたようだ」と

そう聞かされた二ノ姫は、あたりを見回して、ここ一面がなでしこの花で埋め尽くされ
ている風景を想像しました。



「でも今は秋も末、残念ですね」

「あら、あそこにまだ咲いている
お花があるわ。まあ、ここにも」

見れば、ところどころに花が
まだ咲いていました。

「なんてかわいい花かしら。異
国の名を持つ土地で、我が国の
名（大和）を持つ花が咲いてい
るなんて、おもしろいわね」

そういつてみんなは、明るく
笑いました。

一行はその年の十二月二日に都に着きました。そこで二ノ姫が、物語をいっぱい読めたことはいうまでもありません。

のちになって二ノ姫は、当時のことを思い出しながら『更級日記』（まろしな日記）を書くのです。

作・画／平塚てづくり紙芝居の会 たもん丸